

# 「東屋」巻の心理描写

## ——『源氏物語』の「こころ」の表現——

はじめに

奥村英司

『源氏物語』に繰り返される「娘の結婚」という主題の掉尾を飾るのが、浮舟をめぐる物語である。「東屋」巻は、母中将の君が、ようやく探し出した三位の中将という婚約者は、常陸介の実娘に配偶者を乗り換え、姉である中の君に預ければ匂宮に言い寄られ、ようやく隠し住まわせた三条の小家に、唐突に薫が現れて浮舟を宇治に連れ去るという形で落ち着くまでを描く。その間、物語は主として中将の君という受領階級の人物の視点を中心に描かれるという、かつてない手法が用いられ、その前後に薫の逡巡と、浮舟を迎え取る決意とが描かれるという構造になっている。中将の君がいかに娘の結婚に腐心したかを、物語では彼女の言動と内面の描写によって丹念に描いていく。結果として、薫との結婚という中将の君の理想とした結末を迎えるが、それは彼女の思惑を超えた所で、薫の決断というただ一事によってのみ招来した結果であり、もはや彼女は物語の埒外に置かれてしまうしかない。

「東屋」巻の心理描写

物語が、複雑きわまりない人間の「こころ」をいかに描くか、つまり言語化するかという苦闘の最終地点に、浮舟を巡る婚姻譚は位置している。人間の内面を完全に言語化することなど不可能だが、言語化によらなければ本人さえ自己の内面を把握できない。まして、文学作品は言語によつてのみ構築された世界である以上、不完全さを持ちながらも、言語化されたものがその世界の全てであるという逆接を宿命的に背負っている。内面の言語化とは、不定形で、同時多発的な物を、線状の時系列に並べ換えるということだから、内面のある一部が表現されたとき、表現される内面は意識されないままに封じ込められる。あるいは、内面を言語化した瞬間にえもいわれぬ違和感にとらわれる。だが、そうして言語化された内面を、我々は自分の「こころ」として生きていくしかない。三田村雅子は、「登場人物達のいいがたい思いは〈言葉〉というかたちをとる瞬間彼らを裏切っていく。〈言葉〉が観念の奴隷となり、自己欺瞞の装置と化していくことを印象づけ、あばき立てていくために、更なる会話文や心中思惟がまき散らされているのが宇治十帖の状況なのである」<sup>注1</sup>と指摘するが、それは物語が言葉の不完全性という本質に接近したことのあらわれでもある。

いずれにせよ、言葉が書き継がれなければ作品は成立しないし、言語化によらなければ私は私の「こころ」を知り得ない。「東屋」巻に即して言えば、中將の君の行為はその言動と内面描写によつて明快に読者に示される。彼女をめぐる言葉には「自己欺瞞」などない（かのように見える）。彼女の娘への思いは切実であり、読者の共感を生むだらう。一方、この巻での薫は、冒頭で身分差ゆえに逡巡しながら、巻末では一転して浮舟を宇治に連れ去る。その間の心境の変化について物語は何も説明しないから、あたかも高貴な主人公の気紛れ、我が儘のような印象を与える。更に、当事者である浮舟の描写はほとんどされないために、その存在感は希薄、というより存在自体がないかのようと思われるのである。つまり「東屋」巻は、三者三様の描写の手法を用いながら、固有の世界を形成している、

という方法によって記述されているとみることができるのである。そのような見通しの下に、以下作品の具体的な分析を試みたい。

一

「宿木」巻末で、偶然宇治で垣間見た浮舟への仲介を、弁の尼に依頼した薫だったが、「東屋」冒頭では一転して浮舟との関係に消極的であると述べられる。

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、端山の繁りまであながちに思ひ入らむも、いと人聞き軽々しうかたはらいたきほどなれば、思し憚りて、御消息をだにえ伝へさせたまはず、かの尼君のもとよりぞ、母北の方に、のたまひしさまなどたびたびほめかしおこせけれど、まめやかに御心とまるべきことも思はねば、たださまでも尋ね知りたまふらんことばかりをかしう思ひて、人の御ほどのただ今世にありがたげなるをも、数ならましかばなどぞよろづに思ひける。(⑥一七)

薫の心情は、「筑波山端山繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」(『新古今集』恋一・源重之)を引歌として、常陸介の義娘である浮舟への関心を述べるが、それは外聞が悪く身分柄遠慮されると、消極的な心情へと転じていく。この薫の内面は詳述されることなく、「東屋」巻では、浮舟を見いだした薫の消極的な態度が、浮舟を巡る運命を混乱させていくことになる。「端山の繁り」をものもしない「思い入」れが、薫の心にはまだ生じていないということなのであるが、この薫の求婚が、浮舟の結婚を切実な問題として浮上させる結果となっている。

物語の文脈は引き続いて、仲介者たる弁の尼が、浮舟の母中将の君に薫の意向を伝えた事を述べ、それに対する中将の君の複雑な心情に転じていく。身分差を考えれば真剣に受け取るべき話ではないが、その一方娘の結婚相手とし

て薫ほどの理想の人物はいない。「数ならましかば」は、八の宮の娘という高貴な血筋を持ちながらも、母たる中将の君が受領と結婚せざるをえず、そのために理想の夫を迎えてやれないという自身の運命への痛恨が込められている。物語が、薫の内面に踏み込むことをしないのと対照的に、中将の君の心情は一貫してわかりやすく、読み手の共感を誘うように描かれる。これ以降物語は、中将の君に即して、浮舟の結婚という問題を追っていく。

常陸介には、前妻との子に加え、中将の君との間の子があつて、それら実子と、連れ子である浮舟との扱いの違いに、中将の君は不満を抱いていた。

守の子どもは、母亡くなりになるなどあまた、この腹にも姫君とつけてかしづくあり、まだ幼きなど、すぎすぎに五六人ありければ、さまざまにこのあつかひをしつつ、他人と思ひ隔てたる心のありければ、常にいとつらきものに守をも恨みつつ、いかでひきすぐれて面だたしきほどにしながらも見えにしがなと、明け暮れ、この母君は思ひあつかひける。さま容貌のなめにとりまぜてもありぬべくは、いとかうしも、何かは苦しみまでもて悩まし、同じごと思はせてもありぬべきを、ものにもまじらず、あはれにかたじけなく生ひ出でたまへば、あたらしく心苦しきものに思へり。(⑥一七―一八)

高貴な血筋に生まれ、また際立つた美貌を持ちながら、常陸介風情の実子にも劣る扱いを受けるという理不尽。「他人と思ひ隔てたる心」とは、具体的にどのようなものであったか、あるいは中将の君の僻目よるものかも知れないが、「いかでひきすぐれて面だたしきほどにしながらも見えにしがな」とは、夫の理不尽な扱いに対する妻の意地であり、しかも薫との結婚が、その希望を満たす最良の手段となりえている。客観的に見れば不釣り合いな相手であるからこそ、中将の君の矜持を満足させられるのもあり、何より光源氏の息子と結婚することで、弟八の宮の娘である浮舟はその血筋の高貴さを回復することになるわけである。

こうした現実と理想の狭間にあつて、中将の君はまず現実的な判断を優先することになる。浮舟と宰相中将との縁談である。

この母君、あまたかかること言ふ人々の中に、この君は人柄もめやすかなり、心定まりてもの思ひ知りぬべかなるを、人もあてなり、これよりもまさりてことごとしき際の人、はた、かかるあたりを、さいへど、尋ね寄らじ、と思ひて、この御方に取りつぎて、さるべきをりをりは、をかしきさまに返り事などせさせたまつる。心ひとつに思ひまうけて、守こそおろかに思ひなすとも、我は命を譲りてかしづきて、さま容貌のめでたきを見つきなば、さりとて、おろかになどはよも思ふ人あらじと思ひたちて、八月ばかりと契りて、調度をまうけ、はかなき遊び物をせさせても、さまことにやうをかしう、蒔絵、螺鈿のこまやかなる心ばへまさりて見ゆる物をば、この御方にとり隠して、劣りのを、「これなむよき」とて見すれば、守はよくしも見知らず、そこはかとなき物どもの、人の調度といふかぎりはただとり集めて並べ据ゑつつ、目をはつかにさし出づばかりにて。(620)

（二一）

元は上達部の家柄で、その財力や人脈に惹かれて、夫の周囲に集まってくる公達の中から、中将の君は左近の少将を浮舟の婚約者と定める。「これよりもまさりてことごとしき際の人」は、薫を意識しつつ、所詮常陸介風情の婿になろうとする者の、身分の上限として納得する。婚約に至るまで、夫には一切の相談なく「心ひとつに」話を運んだことが、結果として後に夫に対抗心を抱かせる事になるわけだが、「守こそおろかに」以下、自分が浮舟の後見をしてそれなりの婿を迎えてやらなければならないという、中将の君の内なる使命感を記述する。浮舟をないがしろにする夫への面当てが、中将の君にこの結婚を急がせるのだが、いかに彼女がやり手だとしても、所詮は夫の威勢に集まる若者の中から婚約者を選ばなければならないという限界があり、それゆえ夫に黙って話を運ぶのは無理があつた。

この婚約はあらかじめ破綻するべくしてあつたことである。

常陸介への対抗心を持ちながら、所詮はその周辺の世界の枠内に収まるしかないという現実が、この巻の中將の君には一貫してついて回る。それは、これまでの物語世界の枠外の人物の視点から作品が展開するという、新たな作品の世界を示している。続いて、浮舟のためにそれまで持っていた調度を準備し、その価値の分らない夫には適当なものを見せ、それでも介は喜んでいるという、戯画的描写が続く。だが、これは決して常陸介だけを揶揄しているのではない。夫を愚弄しているつもりで、その実常陸介の妻という以上の存在ではありえない中將の君の皮肉な現実までもが、ここで間接的に描かれていると見るべきであろう。夫への対抗心という、わかりやすい心理が、しかし物語の世界を動かす力を持っているというのではなかった。

中將の君が選んだ婿の君、左近少將は、浮舟が常陸介の実子ではないと聞き立腹する。仲人に立った人物が、常陸介に直談判することで、結婚の日取りはそのまま、少將の相手は、介と中將の君の間の幼い娘に変更される。「我は命を譲りてかしづきて」という中將の君の決意も空しく、所詮は一主婦の無力さが露呈するしかなかった。仲人から、浮舟と少將の婚約を初めて聞かされた後の常陸介の言葉を以下に引く。

「さらに、かかる御消息はべるよし、くはしくうけたまはらず。まことに同じことに思つたまふべき人なれど、よからぬ童べあまははべりて、はかばかしからぬ身に、さまざまに思ひたまへあつかふほどに、母なるものも、これを他人と思ひわけたることとくねり言ふことはべりて、ともかくも口入れさせぬ人のことにはべれば、ほのかに、しかなむ仰せらるることはべりとは聞きはべりしかど、なにがしを取りどころに思しける御心は知りはずらざりけり。さるは、いとうれしく思ひたまへらるる御事にこそはべるなれ。いとらうたしと思ふ女の童は、あまたの中に、これをなん命にもかへむと思ひはべる。のたまふ人々あれど、今の世の人の御心さだめなく聞こえ

はべるに、なかなか胸いたき目をや見むの憚りに、思ひさだむることもなくてなん。うしろやすくも見たまへお  
かんと、明け暮れかなしく思ひたまふるを、少将殿におきたてまつりては、故大將殿にも、若くより参り仕う奉  
りき。家の子にて見たてまつりしに、いと警策に、仕うまつらまほしと、心つきて思ひきこえしかど、遙かなる  
所にうちつづきて過ぐしはべる年ごろのほどに、うひうひしくおぼえはべりてなん、参りも仕まつらぬを、かか  
る御心ざしのはべりけるを。かへすがへす、仰せのごと奉らんはやすきことなれど、月ごろの御心違へたるやう  
に、この人の思ひたまへんことをなん、思うたまへ憚りはべる」と、いとこまやかに言ふ。(⑥二七―二八)

仲人なる人物の詳細は語られず、中將の君や少將との関係も不明であるが、常陸介とは初対面であるにも関わらず、  
対面して事情を訴える図太さを持つていた。一方の常陸介も、その初対面の仲人に腹を割って自分の心情を語る。  
「はべり」や「たまふ」が多用された慇懃な語り口や、「よからぬ童」「はかばかしからぬ身」といった謙遜は交える  
が、ここには表裏のない彼の真情が語られている、言い換えれば語られざる内面など存在しないのである。

物語の中では異彩を放つ両者の対面だが、常陸介の言葉からは、いかにも実家で功利的な人間像が伺われる。夫  
に秘密裡に浮舟の結婚話を進めてきたつもりの中將の君であったが、実は「ほのかに、しかなむ仰せらるることはべ  
りと聞きしかど」と、事情を知りながら知らぬふりをされていたに過ぎなかった。少將が常陸介の旧知だったとい  
点で、所詮は夫の手の内での策動に過ぎなかったのである。

そして、常陸介に話を持ち込まれることになれば、「いとらうたしと思ふ女の童」で、「これをなん命にもかへむと  
思」う娘との結婚にすり替えられてしまうのはまた必然であった。血のつながらぬ浮舟はもとより、数ある実子の中  
にも特に溺愛する娘がいるとの設定は、かつての朱雀院と女三の宮との関係を彷彿とさせる。身分の違いはあれ、論  
理を超えた子への妄執は誰にもあることで、それを臆面なく初対面の相手に語ってしまう常陸介は、前述のように隠

された内面を持たない、というより主題的に持つ必要のない人物として描かれていることにもよるが、同時にいかにも人間的で、存在のリアリティを持たされているともみられる。中將の君の視点から散々にその俗物性を批判され、愚弄された常陸介ではあるが、また同時に、その常陸介の作り上げた世界の中に充足するしかない存在として、中將の君は定位しているのである。

## 二

浮舟と左近少將との婚約は破棄され、中將の君は浮舟を中の君に預けることになる。その二条院で、中將の君は勾宮と薫とを垣間見することになった。

宮渡りたまふ。ゆかしくて物のはさまより見れば、いときよらに、桜を折りたるさましたまひて、わが頼もし人に思ひて、恨めしけれど心には違はじと思ふ常陸守より、さま容貌も人のほどもこよなく見ゆる五位、四位ども、あひひざまづきさぶらひて、このことかのことと、あたりあたりのことども、家司どもなど申す。また若やかなる五位ども、顔も知らぬどもも多かり。わが継子の式部丞にて蔵人なる、内裏の御使にて参れり。御あたりにもえ近く参らず、こよなき人の御けはひを、あはれ、こは何人ぞ、かかる御あたりにおはするめでたさよ、よそに思ふ時は、めでたき人々と聞こゆとも、つらき目見せたまはばと、ものうく推しはかりきこえさせつらんあさましさよ、この御ありさま容貌を見れば、七夕ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いといみじかるべきわざかな、と思ふに、若君抱きてうつくしみおはす。女君、短き几帳を隔てておはするを、押しやりて、ものなど聞こえたまふ。御容貌ともいときよらに似あひたり。故宮のさびしくおはせし御ありさまを思ひくらぶるに、宮たちと聞こゆれど、いとこよなきわざにこそありけれとおぼゆ。(⑥四二―四三)



自邸に戻った匂宮の様子を、中将の君の意識に則して描写していく。こには、本来当事者であるはずの浮舟は全く黙殺され、中将の君はひとりの中の品の女房の立場で眼前の光景を見守るのである。

そこには、中将の君の日常と重なり合いながらも全く異質の世界が展開していく。「わが頼もし人」である夫常陸介よりも立派だと思っていた四位・五位の身分の者達が、ここではただ遠巻きに控えているだけの存在であり、義理の息子蔵人も、宮の近くに寄ることすらできない。何よりその匂宮の美貌を見れば、前引の場面で、浮舟と高貴な薫との結婚を、「人の御ほどのただ今世にありがたげなるも、数ならましかば」などと考えたことはあつさり撤回され、「七夕ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは」娘にとってたいへんな僥倖であると考えられる様になる。四位・五位の報告が終わり、私的な場面に移ると、息子を抱いて妻中の君に話しかける私的な場面へと移行する、その一部始終を中将の君は見つめ続ける。

宮と言えは、「故宮のさびしくおはせし御ありさま」という八の宮の様子は、中将の君のよく知るところであつたが、そうした経験を凌駕する世界を目の当たりにしてしまった。なおかつ、その光景の中心に浮舟の異母姉中の君がいるということになれば、この異次元の世界は決して無縁のものではない。薫との結婚によって、それは浮舟の生きる世界となりうるのである。中将の君自身は、この世界の傍観者であるに過ぎない、が、娘という存在を通してそこに参画しうるわけである。翌日、左近少将が姿を見せる。

今朝より参りて、侍所の方にやすらひける人々、今ぞ参りてものなど聞こゆる中に、きよげだちて、なでふことなき人のすさまじき顔したる、直衣着て太刀佩きたるあり。(⑥四四～四五)

これが誰とも知らずに見た少将の印象は、とりたてて強い印象を感じさせることもなかった。その後、女房達の陰口によって、少将と知ると、

聞くらむとも知らで人のかく言ふにつけても胸つぶれて、少将をめやすきほどと思ひける心も口惜しく、げにことなることなかるべかりけりと思ひて、いとどしく悔らはしく思ひなりぬ。(⑥四五)

と、かつてこの少将を浮舟の婚約者にふさわしいと考えたことを後悔するのであった。

物語は、こうして中将の君の内面に則した描写を通して、常陸介や中将の君の生活圈と、薫や匂宮といった主要な人物達の世界とを、隔絶した異質な世界として描き出す。リアリズムとも言うべき常陸介や中将の君の心情は、きわめて明快で読者の共感を得やすいだろう。読者は、浮舟の処遇に心を悩ます中将の君に共感しつつ、その行方を見守ることになる。

浮舟は、その二つの異質な世界の正に境界にある。少将の婚約破棄という屈辱が、彼女のあるべきもう一つの世界への可能性を開いていくようにも思われる。だが、当の本人である浮舟の主体性はおろか、その心情すら全く描写されることはない。これは、浮舟がなにも感じていないということではなくて、物語の方法として彼女の存在感を作品の表面から消し去っているということだ。代わって、母親である中将の君が、娘の処遇の一切を決定していくかのようにも描かれる。

中の君に浮舟を預ける決心をした後、今度は薫が中の君を訪ねる。まさか匂宮の美貌に及ぶはずはあるまいと思う中将の君に、周囲の女房が、二人のどちらが優れているかは決めたい程だと教える。

待たれたるほどに、歩み入りたまふさまを見れば、げに、あなめでた、をかしげとも見えずながらぞ、なまめかしうきよげなるや。すずろに、見え苦しう恥づかしくて、額髪などもひきつくろはれて、心恥づかしげに用意多く際もなきさまぞしたまへる。(⑥五一)

「をかしげとも見えずながら」は、薫の美質が匂宮とはまた異質のものであることを言う描写ではないか。薫の美貌

に疑問を持っていた中将の君の視点からの描写であるだけに、その予想を裏切るありようが際だつ。直接対面するわけでもないのについ身繕いをせずにいらなくなるというのは、自意過剰と言ふべき書きようにも思われるが、匂宮や薫を目の当たりにした中将の君の衝撃が大きいだけ、二つの世界の懸隔もまた大きいのだということになる。

匂宮と薫の美質を目の当たりにした衝撃を抱えながら、中将の君は浮舟を中の君に託し帰宅する。その中将の君の車を見かけた匂宮が、浮舟の存在を発見し言い寄るという事件が起きる。事情を知った中将の君は浮舟を引き取り、三条の小家に移した。常陸介邸にに戻り、中将の君は左近少将今度は娘婿として覗き見ることになる。

少将のあつかひを、守は、またなきものに思ひいそぎて、もろ心に、さまあしく、営まずと怨ずるなりけり。いと心憂く、この人によりかかる紛れどもあるぞかしと、またなく思ふ方のことのかかれば、つらく心憂くて、をさをさ見入れず。かの宮の御前にていと人げなく見えしに、多く思ひおとしてければ、私ものに思ひかしづかましをなど思ひしことはやみにたり。ここにてはいかが見ゆらむ、まだいとうちとけたるさま見ぬにと思ひて、のどかにゐたまへる昼つ方、こなたに渡りて物よりのぞく。白き綾のなつかしげなるに、今様色の擗目などもきよらなるを着て、端の方に前裁見るとてゐたるは、いづこかは劣る、いときよげなめるはと見ゆ。(⑥七九)

浮舟との婚約を一方的に破談とした事への怒り、二条院で見た姿に幻滅させられた事などがありながら、自邸で見る少将は「いづこかは劣る」、決して見劣りすることはないと、中将の君は改めて思う。その人物を実際に見ることのできぬ読者は、ここでいささか混乱させられるのだ。相手は変わったとはいえ、少将が娘婿であることに代わりはないのだから、常陸介の妻として生きる以上、中将の君はこの少将を受け容れていくしかない。だが、読者に示されるのは、関係を円滑にしようというだけのうわべの賞賛ではない。中将の君の本心、偽らざる内面が語られているのであって、彼の美貌は疑いないと認めざるを得ない。つまり、その美貌は相対的なものとして語られているのであ

る。非日常の二条院から、常陸介邸という日常に戻ったとき、中將の君の審美眼もまた変更を余儀なくされる。そして、ここでの中將の君は、二条院の時と違って傍觀者に終わる事はない。

「いでや、心ばせのほどを思へば、人とおぼえず、出で消えはいとこよなりけるに、何ごと言ひゐたるぞ」とつぶやかると、いと心地なげなるさまは、さすがにしたらねば、いかが言ふと、試みに、

しめ結びし小萩がうへもまよはぬにいかなる露にうつる下葉ぞ

とあるに、いとほしくおぼえて、

「宮城野の小萩がもとと知らませば露もこころをわかずぞあらまし

いかでみづから聞こえさせあきらめむ」と言ひたり。(⑥八〇)

新妻に二条院で見た萩の美しさを語る少將を見て、「人とおぼえず」と輕蔑していたはずの少將に歌を贈らずにはいられない。傍觀者から行為者に転じることで、中將の君は自分があるべき世界に帰還することになる。

中將の君の視点で語られてきた物語は、ここであつさりそれまでの日常に充足してしまう中將の君を見放すだろう。それなりの出自を持って生まれた彼女が、結局は受領の妻として生きるしかない。浮舟結婚の物語は、かくして彼女の手を離れることになる。これまでの物語にはなかった異質な世界で、その内面をあからさまに表出しながら生彩を放ってきた中將の君だが、結局は物語を領導する存在たり得なかった。薫と浮舟の結婚を期待しつつ、しかしその結婚は中將の君の手の届かぬ、その埒外において成立していくのである。

## 三

御堂が造営されたことをきっかけに宇治を訪れた薫は、改めて大君追慕の念にかられ、それを契機として弁の尼に

浮舟との仲の仲介を依頼する。

遣水のほとりなる岩にあたまひて、とみにも立たれず、

絶えはてぬ清水になどかなき人のおもかげをだにとどめざりけん

涙を拭ひつつ、弁の尼君の方に立ち寄りたまへれば、いと悲しと見たてまつるにただひそみにひそむ。長押にかりそめにゐたまひて、簾のつま引き上げて物語したまふ。几帳に隠るへてゐたり。言のついでに、「かの人は先ところ宮にと聞きしを、さすがにうひうひしくおぼえてこそ、訪れ寄らね。なほこれより伝へはてたまへ」とのたまへば、「一日、かの母君の文はべりき。忌違ふとて、ここかしこになんあくがれたまふめる、このごろもあやしき小家に隠ろへものしたまふめるも心苦しく、すこし近きほどならましかば、そこにも渡して心やすかるべきを、荒ましき山道に、たはやすくもえ思ひたたでなんとはべりし」と聞こゆ。(⑥八五―八六)

薫の心情は、「絶え果てぬ……」の歌に現れているように、大君追慕一色である。だが、弁の尼との対話の中で、唐突に浮舟の話が持ち出される。二条院にいと薫が思っている浮舟との関係は、中の君も慥憑するところであり、薫が直接接触を試みても構わないはずだが、「さすがにうひうひしくおぼえてこそ、訪れ寄らね」とは、その中の君に知られるのを恐れたか。あるいは、薫にとっては、この宇治の地、弁の尼という人物を経由してこそ、大君の形代として意味を持つという事でもあらうか。その薫にとって、中将の君が「そこにも渡して心やすかるべきを」と、浮舟を宇治に住まわせる希望を持っていたのは好都合であった。

「東屋」巻頭の逡巡から一転して、浮舟を求めるようになった薫の心境の変化は唐突であり、説明されることはない。そもそも世間体に配慮していたのだから、この段階でも大きく状況が変わったわけでもない。いわば気紛れとも言うべき薫の心境の変化である。既にみてきたように、この巻では中将の君の心情に即しながら、浮舟の運命の変転

を描いてきたわけだが、様々に心を碎きながら結局中将の君の思惑通りに事が進むことはなかった。薫の気紛れとも見える心境の変化が、一方で浮舟の運命を大きく変えることになる。

常陸介や左近少将、中将の君の生きる世界では、様々な思惑を巡らすことで、日々を生きている。妻から田舎者と愚弄される常陸介、その常陸介のささやかな権力・財力にすがろうとする少将。中将の君は彼らを軽蔑しながらも結局はその関係の中で生きていくほかない。他方、薫や匂宮の気紛れとも見える行為が、浮舟を翻弄していくことになるのだが、薫も匂宮もそのことには自覚的ではない。「東屋」巻頭で引歌により示された薫の逡巡は、あたかも壁の絵を掛け替えるがごとき安易さで和歌による大君追慕、そこから浮舟を迎え取るという積極性に転じていく。その身軽さは浮舟の身の程から来る気安さではあるが、これまでの薫からすれば意外な印象を与えもする。その強引な展開を可能としているのが、散文的に心情を描写される中の君や常陸介と、和歌的な叙情の文脈で心情が語られる薫、という方法的な対照なのである。「東屋」巻では、散文的な心情表現と、和歌的なそれとが対比的に用いられ、二つの対照的な世界を形成する。一方の世界の人間が他方に生きることが原則としてないが、ただ浮舟一人は、その両世界の狭間で苦悩することとなるだろう。

○『源氏物語』本文は小学館「新編日本古典文学全集」により、引用文末に分冊数・頁数を示した。

注

1 「〈音〉を聞く人々」(『源氏物語 感覚の論理』(有精堂・一九九六)

2 「常陸介と左近少々、それに仲人が加わつての東屋開巻の一場は、帰属的伝統的価値表を揺るがしつつ

物語の最終段階の展開を強力に促進する異世界の人間劇として注目されるのである。（秋山虔「常陸介と左近少将」〔講座源氏物語の世界〕第九集・有斐閣・一九八四）

3 高田祐彦「中将の君の身分意識をめぐって」〔源氏物語の文学史〕東京大学出版会・二〇〇三）は、その名から中将の君を中将の娘と推定する。